講　　話

国土交通省河川局砂防部砂防計画課長

中野　泰雄

私、最近感じていることを3点ばかりお話したいと思います。

この砂防研究報告会、私も実は2年ほど前つくばの国総研におりまして、その時2回程会に参加致しましてその頃からずっと思っていることがございますが、やはり砂防研究の一番のことは、砂防の、土砂災害の現場ではないかということでございます。すべての母といいますか、自然の条件、それから社会的な条件、そういうものを汲み取れるところではないかと思います。このような集まりはおそらく、それぞれの現場のあるいは研究の最先端で研究されていること、それを持ち寄って、砂防の総体としてどういう風になっているのか、研究すべき題材は何か、現場で何が起こっているのかということを確認しあうというのがこの砂防研究報告会の役割ではないかと思いますが、それでもなおもっと大事なのは、災害の現場だと思います。今年も台風14号が九州に大きな被害をもたらしました。今本省では、実はこの台風14号で首長さんが避難勧告を出さなかった、なぜそうだったのだろうか、改善方策はどうしたらいいかという議論を専門の先生方に入って頂いてやり始めたところでございます。首長さんが避難勧告をするというのは大変大きな決断があります。なぜかといいますと、自分が出した避難勧告でからくりをしたら住民の方はどういう風に思うでしょうか。からくりの方が多いと現状ではそう言わざるを得ないのであります。ですから、からくりを何回も続けると住民が信頼しない、避難勧告を出しても逃げないというようなことが起こるのを心配されています。そのからくりの中身としては、土砂災害の起きるタイミングに合っているのかどうかということが一つと、起こる場所がどこだということを限定できないということであります。これはおそらく皆さんが研究の対象にしている一番の根元的なところではないか、どこで災害がおき、いつ災害になるかということであります。それに加えて、どんなというのが災害の対応にあるかもしれませんが、そのことが土砂災害ではよくわかっていないという反映が、今回の避難勧告が出せなかったという大きな原因になっております。皆さんの研究をさらに深めて行くことが大事なことだと思うのですが、もう一方で、住民・首長さんにわかりやすく今起こっていることを説明する、どうなるかということを説明することであります。研究の最前線の成果が首長さんあるいは住民の人に共有できたら、今のままでももっと避難勧告が出せるという風になると私は思っております。是非皆さん方もそういうことに向けて研究を進めていって頂きたいと思います。

それから、もう一点は、災害というものは自然現象であり社会的現象であるということでありまして、自然現象の方はおそらく皆さん調査・研究をされている中でいつも意識されていることだと思いますが、もう一つの方の社会現象、これがやはりこれからはもっと勉強されなければならないところじゃないかと思います。自然現象は皆さんご存じのとおり、例えば雨の降り方、短時間の降雨の多さ、総雨量の降雨の多さ、それが関わってきているということはデータで言われてきているところでありますが、もう一方で今、国も県も市町村も財政の厳しいところでありますのでハードの対策って言うのはかなり限界があります。10年前の半分に予算は減っております。ハードの対策を進めるのはかなり難しく

て、どうしても減災という災害のダメージをあるいは広がりを抑えるという発想で対策を進めないといけないということでありますので、そうしますと土砂新法にありますように、危険な場所を特定して、そしてそこには住まないように少なくとも事業の分母になる危険箇所を増やさないような努力、これが必要な訳であります。そして、もうすぐ我が国の人口がピークを迎えます。人口減少社会に入っていきます。そういう社会になって、土砂災害、危ないとわかっているところにわざわざ住む必要はありません。ですからそのために、法律で危ないところを明示してそこには住まないようにあるいは都市計画とかいろんな土地利用の規制をかけて危ないところには住まない、そうすると、災害の起こる可能性は少なくなる訳でありますので、減災ということにつながっていくのであります。こういうことを是非念頭に置いて、勉強して頂きたいな、研究して頂きたいなと思います。

それからもう一つ私最近、ある人に教わったのですが、この頃本当に雨が降って水害・土砂災害が多いのですが、今本省の方でも砂防基本計画の見直しを行なっております。非常に難しい訳でありますが。私は昨年中部地整に居たのですけれども、管内三重県の宮川というところに土砂災害が起こりました。その後、宮川の本川はどうなっているのかといいますと、その箇所は河床が非常に高くなっております。土砂がもともと淵になっているところはもっと大きな淵といいますか淵が壊れて違う環境になっている。瀬と淵、よく魚の住みやすいという代表選手に瀬と淵を持つべきだという風に言われておりますが、そういうものがなくなるほど大きな土砂の流出で河床が攪乱されている訳であります。そういうことも、災害の中で大きな自然環境を変える要素になっていることを勉強させて頂きました。皆さんも是非、最初に申し上げましたが、災害の現場に行ってどういうことが起こっているのか、どういう対策をすればいいのかということを、研究をあるいは調査をして頂きたいと思います。

これで、私の話は終わります。ありがとうございました。